

奈良・平城京跡右京四条二坊二坪

- 1 所在地 奈良市四条大路五丁目
- 2 調査期間 平城京第一八次調査 一九八一年(昭56)九月
- 3 発掘機関 奈良市教育委員会
- 4 調査担当者 篠原豊一
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代、鎌倉時代～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(奈良)

この調査は、奈良市立都跡小学校校舎増築に伴う発掘調査である。調査地は、平城京跡右京四条二坊二坪の北東部にあたる。調査は、幅三m長さ二〇mの南北に長い発掘区を二カ所(東・西発掘区)設定して行なった。検出した遺構には、奈良時代の井戸二基と、鎌倉時代から室町時代にかけての粘土採掘坑群がある。奈良時代の遺構は、粘土採掘坑群によってほとんど

壊されていたが、東発掘区で二基の井戸を検出した。

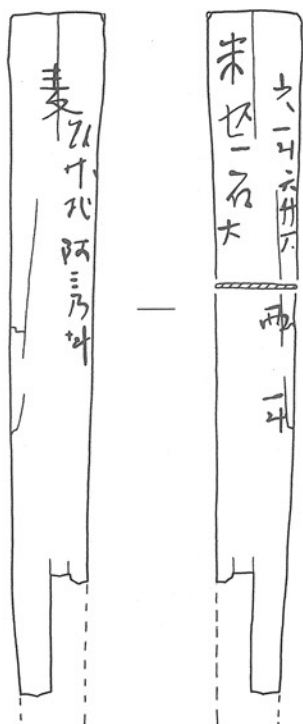
粘土採掘坑群は、ほぼ調査区全面に掘られており、土坑一つが一回の作業単位のようなものである。土坑は一辺が一・五～二m、平面方形である。深さは〇・七m前後で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底は平坦であることから、黄灰色粘土(地山)を採取していることがわかる。採集した粘土は、中世に西の京周辺で造られていた瓦や土器(奈良火鉢など)の材料として用いられたと考えられている。

今回の木簡は、奈良時代の井戸SE〇二から出土した。東発掘区の中央で検出した方形横板組四隅柱横棧留めの木製井戸である。掘形は一辺三・五～四・四m、深さは二・七mである。枠は内法一・三mで、横板は八段分が残り、上下をダボ留めしている。四本の隅柱は二段の横棧と組み合され、自然石の根石の上に据えられている。枠内の埋土は大きく三層に分かれ、下層から奈良時代後半の土器とともに木簡が一点出土した。

8 木簡の釈文・内容

- (1) ・「米」斗六升一「八カ」
 米「玖カ」
 西「一斗」
 ・「升」阿三陀料
 麦

(180)×20×2 019



柱目の薄板の両面に墨書がある。下半は欠損している。形状は檜扇の橋の上半に似ており、転用された可能性がある。

薄板の表裏に米、麦などの穀物の種類と量を記載している。「西□」が粟と釈読できれば、表面には米と粟の量が書かれていることになる。裏面には、麦の量と「阿三陀料」と書かれている。調査地の東側右京四条一坊には、禪院寺の所在が推定されており、「阿三陀料」を阿弥陀料と読めば、寺院に関係した木簡の可能性がある。

9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和五十六年度』（一九八二年）

（篠原豊一）

奈良文化財研究所『平城宮木簡六』の刊行

平城宮東区朝堂院南面から宮東南隅にかけての地域では、近年ダイナミックな官衙の変遷が明らかになっている。奈良時代後半には、壬生門と朝集殿院南門を結ぶ宮内道路の東西に、式部省・兵部省が対称に配置されたが、奈良時代前半の式部省はその東隣に位置していたことが、官衙内の井戸出土の木簡によって明らかになった。また、式部省の西隣への移転後その跡地には神祇官が建てられたことが、官衙配置や木簡をはじめとする出土文字資料によって説明されている。

本書は『平城宮木簡四』『同五』に続く、第三三次補足調査出土の式部省木簡（平城宮東南隅の南面大垣内側の東西溝出土）の完結編であるとともに、右記のような平城宮東南隅地域の説明に大きく寄与した第一五五次・第二二二次・第二七三次調査出土木簡を併せ、計二七八八点の木簡を収録する。

B4判コロタイプ図版一一二丁、A5判別冊解説付き、特製映入り、本体価格二五〇〇〇円

（問い合わせ先）

（株）明新社 TEL 〇七四二一三三三一一

FAX 〇七四二一三六〇〇九三